

海辺を守ろう！創ろう！育てよう！
BLUE BEACH PROJECT
ブルービーチプロジェクト

竹ひび1人1本設置しよう！ ～海辺環境保全活動～

実施報告書

主 催：認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会
共 催：NPO法人日本ビーチ文化振興協会

目 次

3	実施概要
	活動の様子
4	・竹伐採
5	・竹ひび設置
6	・意見交換会
8	議事録

目 的：＜～海辺を守ろう～ブルービーチプロジェクト＞

スポーツ選手が横の繋がりを強化し一丸となって環境保全活動をしていきます。

NPO法人日本ビーチ文化振興協会では、人が海辺と共存することで生まれ「賑わい空間の創出」を目的に、ビーチスポーツの普及、水辺安全教室、青少年育成、はだしによる健康増進などを通して、地域の活性化を推進しています。活動している中、年々深刻になる海辺の浸食やゴミ問題に「島国日本の大切な海辺、通年集える環境を創ろう！」という志から、ビーチ・マリンを使用するアスリートを中心に、2008年より「海辺環境保全活動」をスタートしました。海辺で活動する団体の使命として、次世代によりよい海辺環境を引き継ぐために活動をしています。

＜竹ひび1人1本活動＞

「次世代の子どもたちのために泳げる海に再生しよう」

伝統漁法である「竹ひび」は、漁師が浅瀬に立てた竹の支柱柵で海苔やカキを成長させるために使っていた用具で、海苔やカキの養殖場などで使用されてきました。「竹ひび」を設置することで多くのカキが付着し、これらが海水を浄化させる効果があるだけでなく、魚が住みつき、生物生態系の向上と水質浄化作用があることから、2008年、東京都と東京都公園協会と連携し、葛西臨海公園西なぎさ水質浄化実験をスタートし、2012年にはおよそ50年ぶりとなる海水浴を実施することができました。今後も、竹ひびを用いた水質浄化で、次世代の子どもたちが安心して泳げる海になるよう目指してまいります。

認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会

実施日：（竹採取）2021年9月3日（金） 10:00～12:00

（竹ひび設置・意見交換会）2021年9月5日（日） 8:45～13:00

天 候：（竹採取）雨 最低気温18.7℃、最高気温21.4℃

（竹ひび設置・意見交換会）雨のち曇り 最低気温18.6℃、最高気温24.7℃

実施場所：葛西臨海公園（東京都江戸川区）

参加者：関口 雄三 氏（認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会理事長）

田中 克哲 氏（認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会技術担当顧問）

朝日 健太郎 氏（参議院議員

北京、ロンドンオリンピック出場 元ビーチバレーボール選手）

草野 歩 氏（ビーチバレーボール選手）

新城 悠也 氏（フレスコボール選手）

外山 祐次 氏（フレスコボール選手）

佐々木 桃子 氏（株式会社パソナ）

大竹 有夏 氏（株式会社パソナ）

石田 正則 氏（キャプラン株式会社）

吉澤 裕子 氏（NPO法人日本ビーチ文化振興協会副会長/企画・啓発事業統括部長）

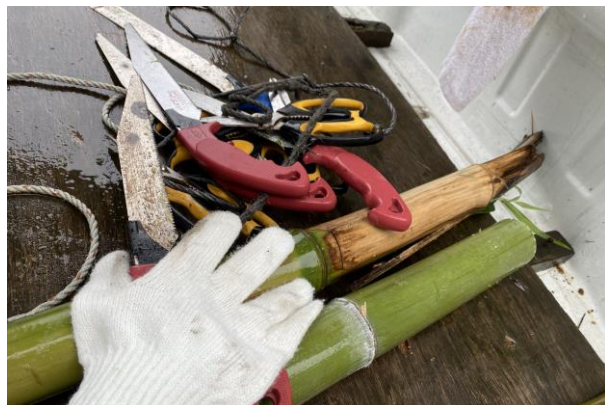
門内 淳 氏（NPO法人日本ビーチ文化振興協会事務局長）

吉澤 頌平 氏（NPO法人日本ビーチ文化振興協会広報）

<竹伐採>



葛西臨海公園内の竹林



伐採で使用した道具



伐採の様子



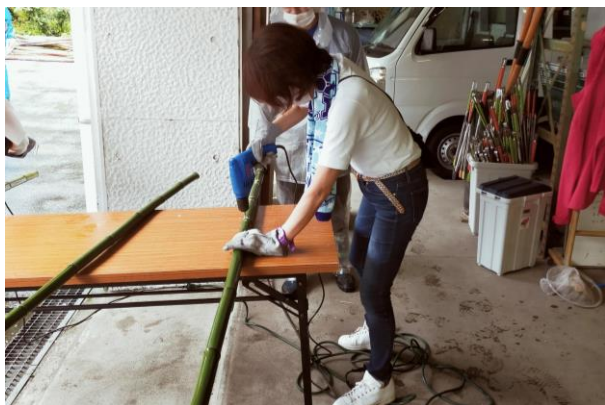
長さ4mほどになるように切る



トラックに伐採した竹を積んで移動



海底に刺さりやすいように斜めに加工



竹の節目の上下に穴を開ける作業



ふるさと東京を考える実行委員会の皆様と記念撮影

<竹ひび設置>



作業用に胴長に着替える



田中克哲氏よりご挨拶



活動内容について説明を受ける



竹ひびをトラックから降ろす様子



ボートに竹ひびを運ぶ様子



竹ひびを設置する場所へボートで移動



竹ひび設置作業の様子



ご参加いただいた皆様と記念撮影

<意見交換会>



進行 吉澤 裕子 氏
(NPO法人日本ビーチ文化振興協会)



関口 雄三 氏
(認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会理事長)



朝日 健太郎 氏
(参議院議員
北京、ロンドンオリンピック出場
元ビーチバレーボール選手)



新城 悠也 氏
(フレスコボール選手)



外山 祐次 氏
(フレスコボール選手)



草野 歩 氏
(ビーチバレーボール選手)



石田 正則 氏
(キャプラン株式会社)



大竹 有夏 氏
(株式会社パソナ)



佐々木 桃子 氏
(株式会社パソナ)



田中 克哲 氏
(認定NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会
技術担当顧問)



意見交換会の様子



意見交換会参加者の皆様

<竹ひび設置・意見交換会>

進行／吉澤 裕子 氏

NPO法人日本ビーチ文化振興協会は、ビーチバレーボール選手を中心に、海水浴以外でも海辺を通じて人が交流し、海辺の環境を考え、ビーチ・マリンスポーツを通して青少年育成に寄与することを目的に集まった志のあるアスリート達から生まれたNPO団体である。また、「ブルービーチプロジェクト」とは、海辺の環境に特化した活動であり、ビーチ・マリンスポーツ選手の横のつながりを強化し一丸となって環境保全活動に取り組むことを目的としている。環境活動にどう取り組んでいいかわからない、またやりたくてもできない、という意見も多々ある事から、アスリートや企業、一般の方に向けた環境活動をスポーツイベントなどを通して楽しく体験して普及していき、やがて 自身の糧につながっていくような窓口になっていこう、という思いから発足した。

関口 雄三 氏

本日は、私の故郷である葛西の海に入って活動していただけたことに感謝している。体験いただいた竹ひび活動の中で一番大切なことは、原因をはっきりさせることであり、原因がわからない限り地球環境を守ることはできない、と考えている。

私がこの活動を始めたのは30代の頃で、この葛西に生まれ育ち、小さい頃は夏休みは毎日海に出かけ日焼けをする、そのような感覚を体験したことで海の怖さや優しさ、自分の身の守り方も自然に覚えた。ところが、近くに製紙工場ができたことをきっかけに廃液が江戸川に流れ込み、その影響で海水浴ができない水質になった。

故郷に戻ってもう一度自分の故郷を見つめながら、ひとつひとつ作っていくことが建築家としての役目だと感じ、建築家である前に一人の人間であると捉えて、どのように社会に尽くせるか考えた。建築物をつくることは社会構造の中で二酸化炭素を排出しているのだが、建築の性能について疑問を抱いた。環境問題は身近なところから疑問を抱かないと上がってこない。東京湾の水質が汚染され、海水浴ができなくなったことについて、まずは原因が何かというところに目を向けることが大事であり、この問題を 早く解決しなければならぬと思い、30代から活動を始めた。

牡蠣1個で400リットルの水を浄化する作用があることから、牡蠣が付着しやすいコンクリートや石油でできたポールを使うか考えていた中で、八王子で活動しているNPO法人からまつで竹が繁殖し、鳥も山に入っていけない状態になっていると相談を受けた。竹を活用することで山も海も循環できる環境をつくろうと考えた。

この活動は100年掛けて継続していかないと汚染水は浄化されない。また、環境問題はひとつになって取組んでいくことが大事であり、自分の故郷は自分で守るという教育を学校現場でも実施しないと環境問題への解決につながっていかない。

アスリートの皆さんの日頃鍛えている体を環境活動に貢献していただきたい。

朝日 健太郎 氏

本日は、日本ビーチ文化振興協会の立場からお話しさせていただく。我々の活動は20年前に始まり、日本の海岸線を豊かにし、海辺と関わる日常「ビーチ文化」を創っていかう、という目的で活動を始めた。その中で「ふるさと東京を考える実行委員会」が行っている活動に賛同し関口氏と話した中で、アスリートが環境活動に取り組むのがいいのではないかと意気投合し今回の活動を企画した。今回アスリートだけでなく、アントラージュ（選手を取り巻く関係者）を巻き込んで実施した良い形であったと思う。

東京オリンピック・パラリンピックを契機に、スポーツという意味を改めて考え直させられた。ビジネスや教育、青少年育成という観点もあるが、共生社会が注目された機会でもあり、スポーツが生み出す価値を改めて考えさせられたタイミングでもあった。

一方、環境問題は気候変動、温暖化による自然災害の発生が多発している。中長期的な課題についてスポーツを通して取り組んでいきたい。

さて、ビーチバレーボールは自然に触れることが多く、砂浜ではだして活動するとゴミに気づき拾う行動をとっている。これは自然と身についていくもので、自然環境に接する活動が自分のライフスタイルの中で環境配慮の行動に転換していると感じた。非日常の体験はこれからの生活に大きなインパクトを与えていると思うので、今後の展望として、多くの方にこの活動を実施していくことが、長い目で見たときに自然環境に対する配慮に繋がっていく。

新城 悠也 氏

フレスコボールとは、ブラジル発祥のスポーツで二人一組になりラケットでボールを打ち合い、ラリーを続けていく競技である。一般的な競技は勝ち負けを決めることが多いが、フレスコボールは相手の打ち返しやすいところに返す、思いやりのスポーツである。30代前半までサッカーを続け、引退を考えていた中でフレスコボールに出会い第二のスポーツ人生をスタートさせた。親子やお年寄りの方でも気軽にできるスポーツとして魅力を感じている。自分自身、環境に対する活動というのが初めてだったが、きっと多くの選手がそうであると思う。実際に体験・体感しないと活動の一步を踏み出すことが難しいと思うので、半強制的にでも一步を踏み出せる機会を作っていきたい。

外山 祐次 氏

自分自身、様々な競技を行ってきて、40歳を過ぎてからフレスコボールに出会った。始めることに対して不安はあったが、誰でも簡単にできる競技に魅力を感じた。ビーチに携わる競技は初めてだったが、ビーチに日々通っているとビーチクリーンをしている人の姿が目につくようになり、自分たちの意識も変わった。普段ビーチで活動している団体として、拠点として活動している逗子で、毎月第1日曜日にビーチクリーンを自治体とともに実施している。今日はとてもいい機会をいただき、竹ひびの活動も体験してみて大変な活動をされている、ということを実感した。これを持ち帰ってクラブで共有し、一人でも多くの方に賛同いただきたい。

草野 歩 氏

葛西臨海公園には、小さいころ潮干狩りなどよく遊びにきていた。今回、自分の故郷に対して環境活動に貢献できたことを非常に嬉しく思う。スポーツ選手として環境活動に参加したかったが、恥ずかしながらどう参加したらいいかわからなかった。今後次の世代を支援していく立場として、環境活動に対するアドバイスができる知識を身につけていきたいと考えていた中で、今回の経験は貴重な機会となった。この経験を若い世代に周知していきたい。

石田 正則 氏

藤沢市の鵜沼海岸近くに住んでおり、土日は犬の散歩でビーチを訪れるが、その際落ちていくゴミを必ず拾うように心がけている。また、ビーチではフレスコボールをされている方の姿も見るが、今まで相手を打ち負かす競技と勘違いしていたので、今回フレスコボール選手の話しから競技の内容を知るきっかけができてよかった。

先ほど関口氏の話しにもあったが、自分たちが住んでいる街の海辺環境は自分たちで守らなくてはならないと改めて感じた。昨年からは会社全体でもビーチクリーン等の活動をしている中で、どう人を巻き込むかが重要であり、どう伝えていけばいいかを試行錯誤しながら続けていた。今回経験したことを参考に続けていき、またいつまでも貴重な体験にするのではなく、全国で当たり前となるような活動にしたい。

我々パソナグループは昨年本社を淡路島に移転してから、島の人たちとの交流について、また海もあるので、ブルーカーボンの取り組みをどのようにしたらいいか議論が始まったので、今回経験した情報を社内で周知していき、取り組んでいきたい。

竹ひび設置は主に腕を使うことがわかったので、次回は腕力に自信のある人を集めて参加したい。

大竹 有夏 氏

テレワーク中心の仕事をしており、今年の夏は家から出ることも少なく運動をしない生活を送っていたので、竹を担いでボートに乗って竹ひびを設置する今日の体験はとても貴重であり、楽しい経験となった。

現在葛西に住んでおり、月に3回ほど散歩がてら葛西臨海公園に足を運んでいる。社会貢献委員として会社の中での活動はしているが、自分が住んでいる身近なところで活動に携われたことは大きな収穫であり、学びであった。貴重な経験で終わらせず、当たり前前の活動として継続していくことが大切だと思うので、今後も竹ひびの活動に携わっていきたい。

佐々木 桃子 氏

パソナグループには社会貢献委員というのがあり、全国に30人ほどの委員がいる。地域貢献やスポーツ、環境などをテーマに1年を通した社会貢献活動を行っている。

私は千葉県船橋市出身で最寄駅が南船橋駅なので、京葉線沿線の葛西臨海公園は思い出の地でもあるが、思い返してみれば海に入ったことがないと改めて感じた。2007年に葛西に住み始めた頃からこのような活動をされていたことに胸が熱くなった。社会貢献委員として思いを持って活動していく中で、どのように伝えていくか考えることが必要だと感じた。体験することが大切だと感じていて、実際に足を踏み入れて活動し感じることで身になっていくと思うので、活動する中で関わる人や参加する人を増やしていきたい。

田中 克哲 氏

昔は1日100本設置をしていたが、職員の高齢化もあり設置の数も少なくなってきてしまったため、今こそ若い力や多くの方に参加いただくことが活動を続けていく上で重要である。竹ひびに牡蠣がついていないところもあるが、これが完成形ではなく試行錯誤しながら続けていくことが大切であり、竹ひび以外にも定期的にビーチクリーンの実施や、冬場には「海苔すき体験」もできるので、今後も皆さんと一緒に活動を続けていきたい。

関口 雄三 氏

お土産にお渡ししている海苔の佃煮は葛西臨海公園の東なぎさで発見された海苔を培養して作ったものであるが、葛西で獲れた海苔のことを江戸時代から「浅草海苔」と言われているのだが、発見されたことは海がキレイになったという証拠でもある。「海苔すき体験」を子どもたちに無料で行っているのだが、その体験を通じて故郷の海がキレイになることで、このような体験などができるということを伝えている。海苔すき以外にも、ハゼ釣りなど楽しみながら地産地消を推進していきたい、と考えている。